

「陽気ぐらし」考ーなぜ三代真柱は110年祭の諭達で「陽気づくめ」を使ったのかー ー「陽気ぐらし」をやめ「陽気づくめ」に変えることが「復元」の第一歩ー

天理教は来年1月に教祖140年祭(2026年)を迎えます。この年祭に際して、2022年に真柱の名前で諭達第四号が出されました。ここで現真柱中山善司氏は、「陽気ぐらし」という言葉を使っています。「陽気ぐらしの天理教」なのですから当然のことでしょう。ところが110年祭(1996年)の時の諭達では、「陽気づくめ」が使われています。このときの真柱は中山善衛氏でした。同氏は晩年心臓が悪く、1995年暮れに心臓移植手術をしたそうです。日本で脳死下の臓器提供が可能になったのは1997年に「臓器移植法」が施行された以後ですから、1995年時での心臓移植手術は違法であったため、ペースメーカーを入れたと周知されたようです。この手術のために天理教立の総合病院「憩いの家」の心臓外科の医師を複数アメリカに留学させたので、当時、同病院の心臓外科のレベルは非常に高かったと言われています。

天理教者の思考として、身体や身の事情が悪くなった時に、自分の心遣いが悪いのではないか、神意に反しているのではないかという発想をします。110年祭に際して、善衛氏は教祖の思いにより近づくことを思案し、「陽気づくめ」が使われたのではないかと私は想像します。教祖の教えとして「おふでさき」にあるのは「陽気づくめ」であり、「陽気ぐらし」ではないからです。

天理教の原典とされる「おふでさき」「みかぐらうた」「おさしづ」の中で「陽気ぐらし」は「おさしづ」に数例あるだけで、「おふでさき」「みかぐらうた」では「ようきづくめ」が使われています。ではなぜ今の天理教では教えの中心に「陽気ぐらし」を置いているのでしょうか。今回はこの辺のところを考えてみます。

諭達第四号 立教百八十五(2022)年十月二十六日 真柱 中山善司 【百四十年祭】
立教百八十九年、教祖百四十年祭を迎えるにあたり、思うところを述べて、全教の心を一つにしたい。
親神様は、旬刻限の到来とともに、教祖をやしろとして表にお現れになり、世界一れつをたすけるため、**陽気ぐらし**へのたすけ一条の道を創められた。／以来、教祖は、月日のやしろとして、親神様の思召をお説き下され、つとめを教えられるとともに、御自ら、ひながたの道をお示し下された。ー以下略ー

諭達第四号 立教百五十六(1993)年十月二十六日 中山善衛 【百十年祭】
立教百五十九年一月二十六日、教祖百十年祭を迎えるにあたり、一言、諭達をもって、全教の心を一つにしたい。
親神様は、旬刻限の到来により、教祖をやしろに元のちばに現れ給い、世界一れつをたすけるための教えをお啓きくだされた。
以来、教祖は、月日のお心のままに、元初まりの真実を明かし、かしもの・かりものの理を説いて、たすけづとめを教え、**陽気づくめ**の誠の道をおつけくだされた。ー以下略ー

「陽気ぐらし」を考えるにあたって、それが一般社会にどのように受け取られているのかをまず見ておきましょう。下の文は歴史学者の渡辺京二氏が「陽気ぐらし」から抱くイメージを書いたものです。「みんな陽気に毎日を暮せばそれがしあわせ」という考え方は典型的な庶民宗教の理念で、そこからは日常レベルの世界を超えた世界宗教・普遍宗教への道はないとあります。この方にとって「陽気ぐらし」のイメージはあまり良くないようです。「陽気ぐらし」という言葉は御利益信仰的な、今現在が幸せならばそれでよいというような印象を与えるのです。ではなぜ天理教は、「おふでさき」にある「ようきづくめ」ではなく「陽気ぐらし」を使っているのでしょうか。

・・・私たちの日常生活のしあわせふしあわせを左右するのは、天下国家に関するようなこと、いわば思想的なことではないからです。それはまず第一に家庭関係、これがうまく行っていれば楽ですし、うまく行かなければ苦しい。第二にはその外にひろがる人間関係、勤め先であるとか近所づきあいであるとか、あるいは友人であるとか、そういう次元でのつきあいがうまくやって行けるかどうかです。さらに第三として、いわゆる商売繁盛であればこれはしあわせですし、商売ないし職務がうまく行かなければふしあわせである。つまり極めて日常的身近的なところで、私たちが苦しいか楽かということが定まってくる。

このところを極めて原理的におさえているのが新興宗教というものだろうと思います。天理教というのがございますね。新聞で見ますと、今年是天理教で百年祭というのが行われるそうです。中山みきという教祖が死にましたのが明治20年、つまり1887年でありますので、今年で死後百年というわけです。その百年祭の大々的なPRが新聞にのっていましたが、あの人たちの中心スローガンは陽気暮しということなんですね。天理教の本拠には陽気暮し館と銘打った建物までありまして、要するに、みんな陽気に毎日を暮せばそれがしあわせなのだとということになっているようでございます。／つまり人生というものは、お互いいがみ合ったりしないで、みんな仲良く明るい気持ちで暮らせばそれが一番なんだ、人生にはそれ以上の秘密はないんだというわけで、それなりに徹底した教えということができます。これは要するに心の持ちようを教えているのですね。私達が一日、憂鬱な顔をして暮らすか、それとも明るい顔をして暮らすかは心の持ちようであるというのです。そして明るい顔をして暮らすと、それが家内安全と商売繁盛につながる。まあ、大体こういう仕組みになっております。これはもう典型的な庶民宗教の理念でありまして、先程からいっております私たちの幸不幸は何よりもまず日常次元のことがらであるという事実に、ぴしゃりと焦点を定めております。ー中略ー

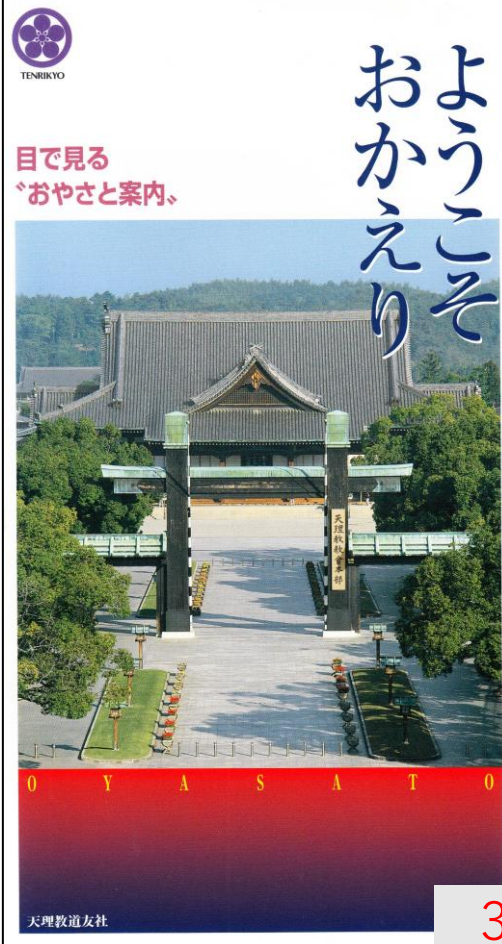
・・・そういうことでおわりであるならば、おそらく真宗寺なんていないんだし、私の人類史講義もいないのです。そんなものに捉われない方がしあわせへの早道ということになります。それがなぜ、真宗寺に寄りつく若者がおり、私の講義を聞きにいらっしゃる方々がいるのでしょうか。それは、いわゆる陽気暮し的なレベルではどうしても満たされないものが、人間のなかにはあるからです。人間のしあわせを支配するのが9割まで日常レベルのできごとだとしても、そういう日常レベルの世界から超脱せしめられる駆動力が、私たちの中に内蔵されているのです。現世利益に還元される庶民宗教のほかに、世界宗教・普遍宗教というものが成立せねばならなかった理由が、そこにあることになります。(『なぜいま人類史か』P11.渡辺京二.葦書房1986)

天理教のキャッチフレーズは、「陽気ぐらし」

あまりに基本的なことなので恐縮ですが、天理教のキャッチフレーズは、「陽気ぐらし」です。天理教人にとってあまりになじんでいる「陽気ぐらし」ですが、ここでは一からどのように説かれているのかを見ていきましょう。はじめておぢば帰りをする信者さん向けに作られたと思われる『ようこそおかえり』という小冊子の「教え」のところでは「陽気ぐらし」という言葉を中心に文章が作られています。

「人間が陽気ぐらしをするのを見て、神も共に楽しみたい」というフレーズは『天理教教典』にあるもので、他でもよく使われます。最後の「世界中の人間が親神様を信じ、教祖の教えを守って歩むところに真の幸福が叶い、やがては真の平和、陽気ぐらし世界が実現する」というのは個人の陽気ぐらしではなく、世界中が陽気ぐらしになるという意味で、「陽気づくめ」といってもよい世界です。「陽気ぐらし」を使っているけれども、表向き説く文章では、「陽気づくめ」の世界観を天理教は提示しています。

教え / 天理教は、世界中の人間をたすけて陽気ぐらしをさせてやりたいという思召から始まった、天理王命（親神様）直々の教えである。 / 親神様は、この世と人間をおつくりくださった「元の神」であり、いまもなお万物を守護されている「実の神」である。祈念するときは「なむ天理王命」と唱える。 / 親神様が人間を創造された目的は、人間が陽気ぐらしをするのを見て、神も共に楽しみたいということにあった。陽気ぐらしとは、世界中の人間が互いに兄弟姉妹としてたすけ合う、明るい、活気に満ちた、喜びづくめの世の姿をいう。 / 陽気ぐらしを実現するには、一人ひとりが自分中心の欲の心を離れ、人をたすける心を養い、たすけ合いの実践に努めることが求められる。そのための手立てとして、教祖は「おつとめ」を教えられ、「おさづけの理」を渡された。 / 「おつとめ」は、人間創造の元の地点である「ちば」に据えられる「かんろだい」を囲み、選ばれた10人の「つとめ人衆」が「かぐら面」をつけ、9種類の鳴物に合わせて勤められる。 / 「おさづけ」は、病だすけの手立てで、その理を戴いた人が、病む人の回復を祈願して取り次ぐとき、親神様は願う心の誠真実を受け取られ、不思議なたすけをお見せくださる。おさづけの理を戴いた人を「ようぼく」と呼ぶ。 / また、天理教では、体は親神様からの借りものであり、心だけが自分のものと教えられる。その心の使い方次第で、体をはじめとする身の周りの一切が守護される。この借りものの体を司る親神様の働きに感謝して、自らの自由になる心を、親神様の思いに沿って使うことが肝要とされる。 / 親神様は、私たち人間が陽気に暮らせるよう日夜お守りくださされている。世界中の人間が親神様を信じ、教祖の教えを守って歩むところに真の幸福が叶い、やがては真の平和、陽気ぐらし世界が実現するのである。（『ようこそおかえり 一目で見る “おやさと案内”』道友社. 2015）



TENRIKYO



天理教ホームページにある「陽気ぐらし」

左の写真は天理教ホームページのトップ画面です。ここから「はじめての方へ」をクリックすると下の画面が出てきます。この画面を下にスクロールしていくと、「天理教について」「聖地『ちば』」「陽気ぐらし」と出てきます。「天理教について」では天理教信仰の中心は「ちば」であるとあり、「聖地『ちば』」は人間創造の際に、最初に宿し込まれた地点であるとあります。「陽気ぐらし」のところには「人間創造の目的である『陽気ぐらし』に近づく生き方を、教祖(おやさま)を通して教えられた私たちは、日々の生活の中で『陽気ぐらし』にふさわしい心になるよう、親神様から大きな期待がかけられているのです。それは、**自己中心的な心遣いをやめて、他者の幸せを願い、たすけ合う心へと成長していくこと**です」と書かれています。最後の「自己中心的な…」のフレーズは渡辺氏が指摘するような「陽気ぐらし」が持つイメージとは違っています。「他者の幸せを願い」というのは、自分の幸せを願う「陽気ぐらし」ではなく、全体の幸せを願う「陽気づくめ」です。

はじめての方へ

信仰している方へ

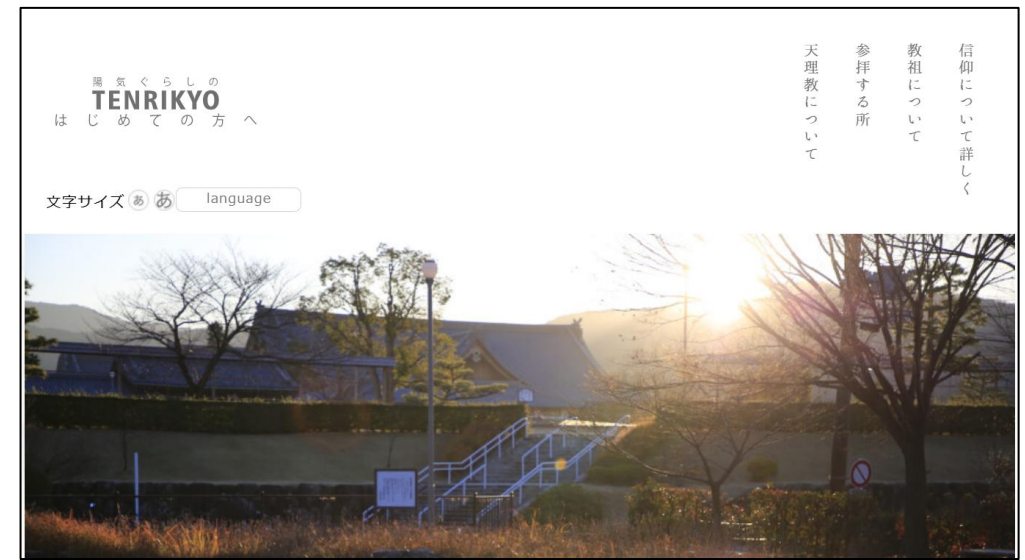
読む・見る・聴く

初めて天理教にふれる方へ。
このホームページでは、
天理教の信仰と聖地「ちば」
についてご紹介します。

天理教道友社、
出版物の紹介

信仰している方へ

このホームページは、陽気ぐらしに向かって成人の歩みを進めるようばく信者向けの情報サイトです。



天理教について

天理教は、江戸時代の天保9年（1838年）、教祖・中山みきによって始められました。現在、日本国内を中心に、約1万4千の教会があります。信者数は120万人を数え、その教えは海外80カ国に広がっています。

天理教信仰の中心は、親神・天理王命（おやがみ・てんりおうのみこと）によって人間創造の地点と教えられる聖地「ちば」です。奈良県天理市に位置し、天理教教会本部の神殿と礼拝場は「ちば」を取り囲むように建てられています。

聖地「ちば」

創造説話「元初まりの話」は、こう始まります。

『この世の元初まりは、泥の海でした。神様は、そのさまを味気なく思われ、人間を造り、その陽気ぐらしするのを見て、ともに楽しもうと思いつかれました』

人間は、そもそも仲良く陽気に暮らすために創造された存在で、人生の目的は「陽気ぐらし」にあると明かされています。

創造主である神様のお名前を、「天理王命（てんりおうのみこと）」と申します。私たち人間を生み育ててくださった親なる神様という意味で、「親神（おやがみ）様」と呼びます。

そして人間創造の際に、最初に宿し込まれた地点を「ちば」と言います。

ここには、天理教の教祖は中山みきであり、教会数、信者数がでていて、その信仰の中心は「ちば」であり、その教えは「陽気ぐらし」であることが書かれています。

まぎれもなく天理教の教えの中心は「陽気ぐらし」であることが明示されています。

陽気ぐらし

親神・天理王命は、人間が互いにたすけ合う「陽気ぐらし」の姿を見て共に楽しみたいとの思いから、人間と自然界を創り、これまで絶え間なく守り育んできました。人間に体を貸し、果てしなく広く深い心で恵みを与え、「親」として温かく抱きしめ、教え導いています。

人間創造の目的である「陽気ぐらし」に近づく生き方を、教祖（おやさま）を通して教えられた私たちは、日々の生活の中で「陽気ぐらし」にふさわしい心になるよう、親神様から大きな期待がかけられているのです。それは、自己中心的な心遣いをやめて、他者の幸せを願い、たすけ合う心へと成長していくことです。

[さらに詳しく>](#)

前ページの「さらに詳しく」をクリックすると出て来るのが、下の文です。前ページの「陽気ぐらし」に追加されているのは「“神様からの手引き”」と、教えの根拠としての原典と『天理教教典』についての部分です。

この文からは、「陽気ぐらし」とは、①自己中心的な心遣いをやめて、他者の幸せを願い、たすけ合う心へと成長していくこと、②つらく悲しい出来事でさえ、実は神様による導きであるという真実に目覚めたとき、何ごとも前向きに受けとめ、明るく陽気に生きていくことができる、という二点が示されています。①は前ページの繰り返しで「陽気ぐらし」からイメージされる個人のしあわせではなく、「他人の幸せ」が目指されています。それに対して②は、自分自身の心の持ちようの問題です。①と②はまったく違う内容です。どうして「陽気ぐらし」の説明で異なった内容が併記されるのか、その理由を考える必要があります。

次に「さらに詳しく」で最後に付け加えられている教理の元たる『天理教教典』について次に見ていきましょう。

陽気ぐらし

そもそも、私たちが暮らすこの世界は、どうやって創られたのでしょうか。人間は何のために生きているのでしょうか。そうした、人々が古来持ち続けてきた根本的な問いに対する明確な答えが、天理教では具体的に示されています。／親神・天理王命は、人間が互いにたすけ合う「**陽気ぐらし**」の姿を見て共に楽しみたいとの思いから、人間と自然界を創り、これまで絶え間なく守り育ててきました。人間に体を貸し、果てしなく広く深い心で恵みを与え、「親」として温かく抱きしめ、教え導いています。

人間創造の目的である「陽気ぐらし」に近づく生き方を、教祖（おやさま）を通して教えられた私たちは、日々の生活の中で「陽気ぐらし」にふさわしい心になるよう、親神様から大きな期待がかけられているのです。それは、**自己中心的な心遣いをやめて、他者の幸せを願い、たすけ合う心へと成長していくこと**です。

私たちや周りの人々に、病気やつらいことが起こったときでも、それは私たち人間の心を育てるための“**神様からの手引き**”にほかなりません。**つらく悲しい出来事でさえ、実は神様による導きであるという真実に目覚めたとき、何ごとも前向きに受けとめ、明るく陽気に生きていくことができる**でしょう。さらに、その思いは、神様に対する感謝と喜びを生み、私欲を忘れて他者のために行動する「ひのきしん」へとつながっていきます。

天理教の信仰はすべて、**教祖・中山みきの口を通して教えられた親神・天理王命からの啓示に基づいています**。教祖は、「陽気ぐらし」に近づく生き方を、私たちに分かりやすい言葉で伝え、文字に記し、自らの行動で教えました。なかでも、**教祖の直筆による「おふでさき」**を含む天理教原典と、それに基づく『天理教教典』は、信仰の揺るぎない拠りどころとなっています。（「天理教HP」）

『天理教
教典』の
「陽氣ぐ
らし」

天理教ホームページが「『天理教教典』は、信仰の揺るぎない拠りどころ」とする『天理教教典』を見ていきましょう。冒頭の「第一章おやさま」のところから「陽気ぐらし」は出てきます。また、第十章はタイトルそのものが「陽気ぐらし」です。ただ、すぐに引用されている「みかぐらうた」には「ようきづくめ」が入っています。「おふでさき」にある「陽気づくめ」を「陽気ぐらし」の説明に用いています。また、「おさしづ」の引用では「後々の者苦しますようでは、ほんとの陽気とは言えん」とあって、自分以外の者も陽気でなければならない、「陽気づくめ」である必要があることが示されています。

第一章 おやさま

……かかる人々に、親神の教を納得させるのは、並大抵なことではなかつたとはいえ、教祖が月日のやしろにおわす真実を納得させずしては、いつまでも、たすけ一条の道は啓かれず、陽氣ぐらしへの立て替えは望めない。されば、教祖は、頑是ない子供をはぐくみ育てるように、世の人々の身にもなつて、説き聴かせ、或は筆に誌し、又は、親神の自由自在の働きを目のあたり知らせ、身を以て行に示すなど、うまずたゆまず導かれた。／ 教祖は、世界の子供をたすけたい一心から、貧のどん底に落ち切り、しかも勇んで通り、身を以て陽氣ぐらしのひながたを示された。更に、親神が教祖をやしろとして、じきじき表に現れている証拠として、よろづたすけの道あけであるをびや許しをはじめとし、親神の守護を、数々、目のあたりに示して、疑い深い人々の心を啓かれた。……（『天理教教典』昭和24(1949)年.P5）

第十章 陽氣ぐらし

たすけの道にいそしむ日々は、晴れやかな喜びに包まれ、湧き上る楽しさに満たされる。それは、常に、温かい親神の懷に抱かれ、人をたすけて我が身たすかる安らぎの中に身を置くからである。これが、陽氣ぐらしの境地である。

親神は、陽気ぐらしを見て、共に楽しみたいとの思わくから、人間を創められた。 されば、その思召を実現するのが、人生の意義であり、人類究極の目的である。

いつまでしん／＼＼したとても やうきづくめであるほどに 五下り目 5

明るく勇んだ心、それは陽気な心である。この陽気な心で日々を送るところに、真の幸福があり、生き甲斐がある。いか程長く道をたどっても、心が勇まずに、いずんでいては、親神の心になわぬ。親神の守護のままに、日々、喜びと楽しみの中に生活するのが、人の世のこの上ない味である。閉された心の窓を開き、遍(あまね)き親神の光を身に受ける時、自ら暗い迷いの雲は晴れて、明るい喜びの中に立つ。陽気ぐらしとは楽しみづくめの生活である。

陽氣ぐらしは、他の人々と共に喜び、共に楽しむところに現れる。皆皆心勇めば、どんな理も見え、どんな花もさく。

皆んな勇ましてこそ、真の陽気という。めん／＼楽しんで、後々の者苦しますようでは、ほんとの陽気とは言えん。(明治30・12・11)
(『天理教教典』P92)

「第十章陽気ぐらし」の最後、「親神の待ち望まれる陽気づくめの世界になる時、この世ながらの限りない生氣溢れる楽土が全うされる」というところで「陽気づくめ」が使われています。アンダーラインの部分は「おふでさき」にある「ようきづくめ」のイメージをまとめたようです。ですから、ここは「陽気ぐらし」という言葉から受ける印象とはやや異なっています。

「一中略」以降は『教典』全体のまとめのような感じの部分で、「楽しみづくめの陽気ぐらし」になっています。「陽気ぐらし」を使いつつ、「づくめ」も取り入れたということでしょうか。

人々は、この親心にもたれつつ、世界中皆一れつは隔てない親神の子、兄弟姉妹という理を心に治めて、高きものも低きものも、遠きものも近きものも、相互に助け合い、常にたゆまず、ひながたの道をたどり、陽気に勇んで、心のきりなしぶしんにいそしむならば、やがては、全人類の心も入れ替り、世は自と立て替ってくる。

かくて、世界一れつの心が澄みきる時、たすけ一条の思召が成就して、親神の守護は余りなく垂れ、ここに、人の世は、未だかつてない至福を受ける。これぞ、楽しみづくめの世界、神人和樂の陽気づくめの世界であり、真正の平和世界である。思えば、人類社会は、久しく文化の進展を遂げながらも、徒(いたず)らに迷いを重ね、行方も知らぬ闇路にさすらいつつ、今日にいたった。それは、互に争を事とし、争を経ることによって、己のよき生命を楽しめるものと、思いあやまって来たからである。しかも他面、人は平けく安らかな生活をのみ求め望んで止まない。これは、限りない矛盾撞著ある。この矛盾を解き、撞著を治めるのが、たすけ一条のこの道である。これこそ、人類に真の心の支えを与え、光ある行手を教える唯一の道である。

世界は、平和を求めて止まない。しかし、真の平和世界は、ただ 人間相互が争わぬだけで、全うされるものではない。よしや、それは争のない姿であっても、光溢れる平和の訪れではない。真の平和世界は、親神の理によってのみ築かれる。この親神の道が、人々の胸に正しく治められ、すべてが、己が利欲を忘れ、温かい親神の守護の下、互扶けの真実の働きにつとめ合い、親神の待ち望まれる陽気づくめの世界になる時、この世ながらの限りない生氣溢れる楽土が全うされる。（「第十章陽気ぐらし」のまとめの部分. P96）

一中略

かくて、我も人も共に和し、一手一つの心に、楽しみづくめの陽気ぐらしの世界が守護頂ける。それは、親神の望まれる真の平和世界であり、これぞ、この道の目標(めど)である。道の子は、存命のまま導かれる教祖に抱かれ、ひたすら、世界人類の平和と幸福(こうふく)を祈念しつつ、たすけの道に弥(いや)進む。

このみちハどふゆう事にをもうかな このよをさめるしんぢつのみち 六 4 （『天理教教典』全体のまとめ部分の最後. P98）8

「第六章 てびき」

「第六章てびき」にも「陽氣ぐらし」がでています。「いかなる病氣も、不時災難も、事情のもつれも、皆、銘々の反省を促される篤い親心のあらわれであり、真の陽氣ぐらしへ導かれる慈愛のてびきに外ならぬ」というのが、天理教HPの「さらに詳しく」の②の元になっています。この部分が「陽氣づくめ」にならない「陽氣ぐらし」の説明です。
この第六章でも最後のところでは「陽氣づくめ」になっています。「陽氣ぐらし」といいつつ、その実態は「陽氣づくめ」なのです。

第六章 てびき / 人は皆、苦しみを厭い、楽しみを求め、悩みを避け、喜びを望む。親神が、陽氣ぐらしをさせたいとの思召で、人間世界を造られたからである。 / しかるに、世には、病苦にさいなまれ、災厄におそわれ、家庭の不和をかこち、逆境にもだえるなど、その身の不幸をなげいている人が多い。それは、親神を知らず、その深い親心を知らないからである。 / 親神は、一れつ人間の親におわす。しかるに、人は、この真実を知らず。従って、互にひとしく親神を親と仰ぐ兄弟姉妹であることも知らずに、銘々が勝手に生きているように思いあやまり、われさえよくばの我が身思案や、気ままな行をして、他の人々の心を傷つけ曇らし、世の親和を害ない紊(みだ)しているばかりでなく、それがために、己れ自らの心をも傷つけ曇らせていることを気付かずにいる。 / 月日にハたん / みへるみちすちに こわきあふなきみちがあるので 七七 / 月日よりそのみちはやくしらそふと をもてしんばいしているところそ 七八 / 親神は、知らず識らずのうちに危い道にさまよいゆく子供たちを、いじらしと思召され、これに、真実の親を教え、陽氣ぐらしの思召を伝えて、人間思案の心得違を改めさせようと、身上や事情の上に、しるしを見せられる。 / なにゝてもやまいいたみハさらになし 神のせきこみてびきなるそや 二七 / せかいちうとこがあしきやいたみしよ 神のみちをせてびきしらすに 二二二 / 即ち、いかなる病氣も、不時災難も、事情のもつれも、皆、銘々の反省を促される篤い親心のあらわれであり、真の陽氣ぐらしへ導かれる慈愛のてびきに外ならぬ。（『天理教教典』P57）

「第六章てびき」の最後

しかし、人間心のはかなさは、折角、てびきを頂いて、心を定めても、時がたてば、一旦定めた心もいつのまにか動いて、形ばかりの信心におち、知らず識らずのうちに、又もや、親心に反する心を遣うたり、行をしたりして、しかも、気付かずにいる場合が多い。 / 神の自由して見せても、その時だけは覚えて居る。なれど、一日経つ、十日経つ、三十日経てば、ころっと忘れて了う。（明治31.5.9） / と示されている所以である。故に、 / 日が経てば、その場の心が弛(ゆる)んで来るから、何度の理に知らさにならん。（明治23.7.7） / と仰せられ、ともすれば弛みがちな心をはげまして、なおも心の成人を促される上から、信心するうちにも、幾度となく、身上や事情の上に、しるしを見せ、心を入れ替える節を与えられる。この篤い親心を悟って、益々心を引きしめて通ってこそ、生涯変らぬ陽氣づくめの理を見せて頂ける。 / かくて、教の理が胸に治り、心が次第に成人するにつれて、大難は小難に、小難は無難に導かれる親心が、しみじみと感じられて、今まで喜べなかったことも、心から喜べるようになり、今まで楽しめなかったことも、心から楽しめるようになる。 / 陽氣づくめの境地への力強い足どりが、こうして進められてゆく。

しやんして心さためてついてこい すゑハたのもしみちがあるぞや 五 24 （『天理教教典』P61.「第六章てびき」）

『天理教教典』第六章、第十章で「陽気づくめ」という言葉が使われているのは、「おふでさき」の用語は「陽気ぐらし」ではなく、「ようきづくめ」だからでしょう。「よふきづくめ」は「おふでさき」に19例、「みかぐらうた」に1例あります。「陽気ぐらし」はありません。

後で詳しく見ていきますが、明治45年頃までは天理教のキャッチフレーズは「陽気づくめ」でした。原典に沿っているという立場から考えれば、「陽気づくめ」なのです。

ちなみに『おさしづ』の中に、「陽気ぐらし」は、5例あり、「陽気づくめ」も1例あります。また『おさしづ』には「陽気遊び」とか、「陽気」という言葉も出てきます。

世界の人皆が幸せになるのが「陽気づくめ」

「おふでさき」の「ようきづくめ」の意味は十号103.の「せかへちううハどこまでも よふきづくめにみなしてかゝる」に表れているように、「世界中」の人類皆が陽気、幸せになれるということです。

「おふでさき」「みかぐらうた」中の「ようきづくめ」

「おふでさき」中の「よふきづくめ」用例 十九例

- | | | | | | | |
|-----|------|-------------------|---------------|-----------------|-----------------|-----------------|
| 三号 | 54. | いちれつに神がそふちをするならば | 心いさんて | <u>よふきづくめ</u> や | | |
| 四号 | 77. | しんぢつにこのほんみちがついたなら | すへハたのもし | <u>よふきづくめ</u> や | | |
| 六号 | 5. | 上たるの火と水とをわけたなら | ひとり | をさまる | <u>よふきづくめ</u> に | |
| 七号 | 92. | 月日よりこの一ぢよをはらしたら | あとのところ | わ | <u>よふきづくめ</u> や | |
| | 93. | にち／＼に | <u>よふきづくめ</u> | とゆうの | わな | いかなる事やたれもしろまい |
| | 108. | 月日にハとのよな事も一れつに | みなにを | しへて | <u>よふきづくめ</u> に | |
| | 109. | せかいぢうみな一れつハすみきりて | <u>よふきづくめ</u> | にくらす事なら | | |
| 十号 | 61. | だん／＼とにち／＼ | 心いさめかけ | <u>よふきづくめ</u> | をみなにを | しへて |
| | 103. | このさきハ | せかへちううハどこまでも | <u>よふきづくめ</u> | にみなしてかゝる | |
| 十一号 | 53. | いまゝでと心しいかりいれかへて | <u>よふきづくめ</u> | の心なるよふ | | |
| | 55. | にち／＼にひとり心がいさむなり | <u>よふきづくめ</u> | の心なるよふ | | |
| | 56. | 月日よりにち／＼ | 心いさめかけ | <u>よふきづくめ</u> | にしてかゝるでな | |
| 十二号 | 45. | これさいかみへきたならば一れつわ | とんなものでも | <u>よふきづくめ</u> や | | |
| | 57. | あとなるハよろづ月日がひきうけて | いつ／＼までも | <u>よふきづくめ</u> に | | |
| 十三号 | 25. | それからわ | せかいぢううハ | きがいさむ | <u>よふきづくめ</u> | にひとりなるぞや |
| 十四号 | 24. | これからハ心しいかりいれかへて | <u>よふきづくめ</u> | の心なるよふ | | |
| | 27. | 月日より | <u>よふきづくめ</u> | とゆうのをな | これとめたなら | さねんゑろなる |
| | 55. | これさいかたしかに | しよちしたならば | いつまでいても | <u>よふきづくめ</u> や | |
| 十七号 | 23. | このみちを | はやくみとふて | せきこんだ | さあこれからハ | <u>よふきづくめ</u> や |

『みかぐらうた』中の「よふきづくめ」用例 一例

(五下り目) 五ツ いつまでしん／＼ したとても やうきづくめであるほどに

「陽気づくめ」社会は「正義(公正)」に基づく社会

教祖は理想的な社会を「陽気づくめ」と表現しました。20世紀の哲学者、ジョン・ロールズ(1921～2002)はそれを「正義(公正)＝正しい状態」が実現されている社会とし、その原理をまとめました。戦争などで人々の自由が奪われ、片方に贅を尽くす人がいて、一方に食べるものにこと欠く人がいる世界の状況から、どのような社会ならば誰もが生きづらくない社会が出来るのかとの思索の結果として『正義論』が生まれたのです。まず平等な自由があって、次に第二原理の(a)と(b)に該当しない不平等は認めないと説いています。「誰もが生きづらくない社会」を「陽気づくめの社会」と置き換えることは出来ませんが、「陽気ぐらし」ではそれは出来ないのではないのでしょうか。

アメリカの哲学者ジョン・ロールズは、資本主義的福祉国家のような、不平等が生じるのを前提とする社会ではなく、最初から不平等が生じない社会、生じたとしても最小限になる社会をつくるべきだと考えました。／そして、正義にかなった社会を実現するために必要な条件をまとめた『正義論(A Theory of Justice)』を1971年に発表します。／ここでいう「正義」は、「正義のヒーロー」のように使われる日本語の「正義」の意味ではなく、「公正」という意味です。／ロールズは、「公正な条件の下でみんなが選ぶ原理」という意味で、「公正としての正義」(Justice as fairness)としました。(『平等ってなに?』P18. 神島裕子監修.PHP. 2023)

みんなが選ぶ「正義の二原理」 (『平等ってなに?』P20)

ロールズが思考実験によって導き出したのが「正義の二原理」です。これらの原理にあてはまるとき、社会は正しい状態にあると考えました。

正義の二原理 原初状態の思考実験によって、不平等が生じない、生じたとしても最小限になる社会の原理としてロールズが提唱した原理は、2つありました。それらは「正義の二原理」とよばれています。

●第一原理 すべての人は、基本的な自由について平等な権利をもつ(平等な自由の原理)

ここでいう「基本的な自由」には、以下のものがふくまれます。

- ・政治的な自由(投票権や公職就任権)・言論および集会の自由・良心、思想の自由・人身の自由・個人的財産を保有する権利

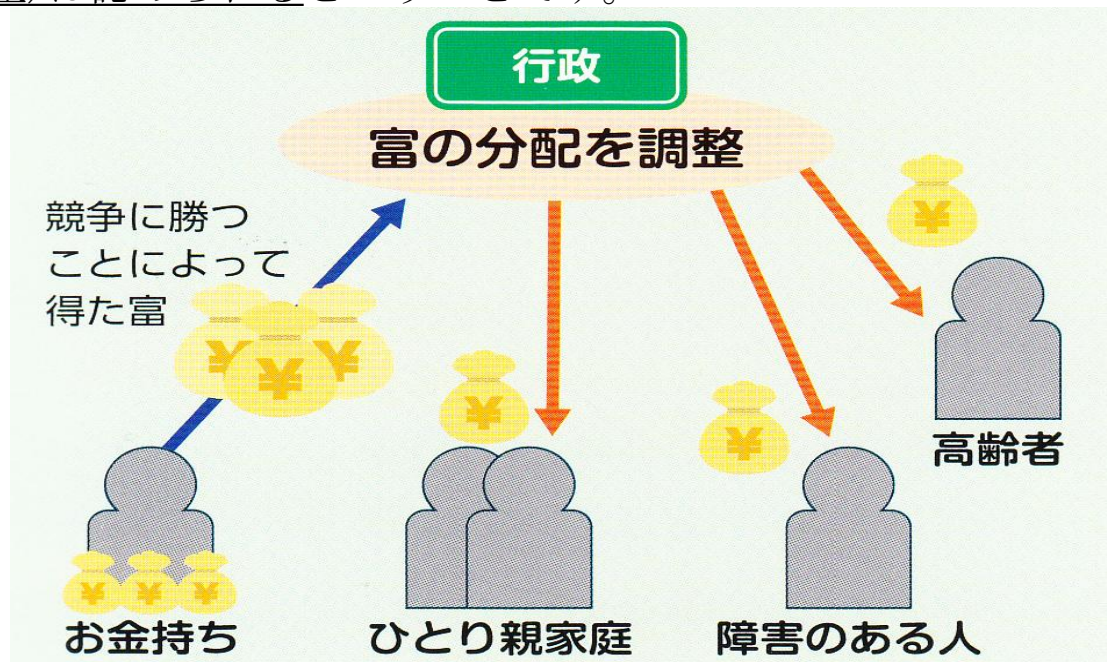
第一原理は、こうした基本的な自由が、人によって多いとか少ないとかいうことがあってはならない、つまり平等であることを要求しています。たとえば、肌の色に応じてこれらの自由の数や特定の自由の幅がちがうことは認められません。

●第二原理 社会的・経済的な不平等は次の場合にのみ許容される a 最も恵まれない人びとにとって最大の利益になるとき(格差原理) b 公正な機会の平等が確保されているとき(公正な機会均等の原理)

第一原理の段階で、基本的な自由の平等が実現します。政治的・市民的自由の点では、人生のスタートラインが同じと考えてもいいでしょう。しかし、実際に各人が自由に社会的・経済的な活動を行っていくなかで、チャンスに恵まれない人もいて、結果として社会的・経済的な不平等が生じることもあります。／第二原理は、第一原理が保障されたうえでなら、社会的・経済的な不平等を許容してもいい場合の条件を示しています。／その条件とは、「格差原理」「公正な機会均等の原理」とよばれるものです。11

●「格差原理」とは？

結果として、社会的・経済的に優位に立った富裕層が、より多くの税金をおさめ、それが貧困対策などにあてられることで、最も恵まれない人びとにとっての利益になるのなら、その社会的・経済的な不平等(格差)は認められるということです。



競争によって生まれた格差も、富の再分配を通して恵まれない人びとの利益になるのなら認められる。

●「公正な機会均等の原理」とは？

公正な機会均等が実際にあたえられた結果として、社会的・経済的な不平等が生じたのであれば、その不平等は許容されます。

ただし、実際には機会均等が公正なものでなかったとしたら、生じた不平等は是正されなければなりません。

なお、正義の二原理には優先順位があり、第一原理は第二原理に、第二原理のうち公正な機会均等の原理は格差原理に、それぞれ優先するとされています。これは、最も恵まれない人びとにとって最大の利益になることであっても、公正な機会均等や第一原理の基本的な自由は、決して制限されてはいけないことを示しています。

経済的な平等の実現をめざした社会主義は、結果的に個人の自由を制限・抑圧する社会を生むことになりました。そのため、ロールズは社会主義とは一線を画すために、第一原理を優先させたと考えられています。(『平等ってなに?』P21)

なぜ天理教では、「陽気ぐらし」を使うのか

ここまで見てきたように「陽気ぐらし」の説明部分では「陽気づくめ」の内容になっているのですから、最初から「陽気づくめ」を使えばいいのではないかと思います。ところが「陽気ぐらし」を使う理由は何なのでしょう。

改元とようきづくめ

今上陛下御歳祚あらせられて、直ちに改元の事あり、「大正」と號せらる。「大正」は、易に「大亨以正、天之道也」とあるに典據せられたるものにして、之れを大畜に見るに「剛健篤實輝光、日新其德、剛上而尚賢、能止健、大正也。」とあり。剛と云ひ、健と云ひ、新と云ひ、光と云ふ何れか皆な陽氣の意を示さざる。由來我が天理教は、陰氣を退けて陽氣を尚び、消極を去つて積極に就き、汚穢を離れて清潔に向はん事を教ゆる「ようきづくめ」の宗教也。

本教は、明治二十一年教會設置の公認を受けてより、年々歳々、駭々乎として進歩發展し、今や居然たる一大宗教團體とあり。これ一に、其教徒等が能く教祖の衣鉢を襲ひて、陽氣の心を持ち、陽氣の活動をなしたるが爲めのみ。然れ共、人心は稍ともすれば萎靡し、萎靡して停滯し、停滯して腐敗し、腐敗してバチルスが生ずるをせざるべからざる。されば陽氣の教を耳にし、陽氣の心を持せざるべからざる我が天理教徒も、同じく世間一般人の通有性を有する限り、人として免れ難き沈滯の氣の、時に又、個人の中に、教會の中に發生して、進歩を妨げ、發展を害し、延いて腐爛するをからんや。

バチルスは、天より降らず、地より湧かず、各人の心の中の埃より起る。埃は微細微小にして、常に人間意識の感覺に觸れずして生じ、積り積りては大山をなすに至る。茲に於てか、平素祓除の用意、寸毫も懈怠あるべからず。固より我等は、不滅、用ひて極りなき不思議の靈を神に享く。教祖の助を蒙り、教理の道を辿り、常に健、常に剛、日其德を新にせば、庶幾くは大正の時代は、我等天理教徒の上に、更に赫々たる光輝を與へ、眞に「ようきづくめ」の人たるを得しめん。

天理教の機関誌『道乃友(みちのとも)』は、明治24年に創刊され、現在まで途切れることなく発行され続け、保存もされている日本では稀有な存在です。それゆえ、教内用語がいつ頃、どのように変わったかを知る上ではたいへん重宝です。では、「陽氣…」はどのように変わったのでしょうか。

大正元年9月号に「改元とようきづくめ」という文があり、そこに「『陽氣づくめ』宗教也」とあります。そして大正6年4月号には「陽氣ぐらし」というタイトルの文があります。「ようきづくめ」から「陽氣ぐらし」へ変わったのは、大正初期のころです。

陽氣ぐらし

武 谷 兼 信

御教祖の御遺訓に

「月日には人間はじめかけたのは、陽氣ゆさんが見たいゆゑなり」

「世界にはこのしんじつを知らんから、みなごこまでもいづむばかりで」

と仰せられたる所より察するに、最初神様が人間を御造り下されたる第一の目的は人間に「陽氣ぐらし」をさせて、神人共に樂みたいとの御思召であつたに相違ない。然るに人間は、神様の愛子たる多數人間の間に造られたる此の世界を、吾れ一人のために造られたるものと如く誤解して、身引き身慾の

心にて、吾れさへよくば人はどうでもといふやうな自分本位の濁つた心にて通り來りたるがために、神様の御思召に背き、天理に背いたる結果、遂に病氣災難不自由といふやうな、いまはしき現象があらはるゝこととなりて、病氣に苦しみ、災難に泣き、不自由をかこつ人多くなり行き、従つて自分の思ふやうにならず、好きなやうにならぬにつけては、自然に「いづむやうになり、陽氣であるべき此の世界は陰氣となり、樂みに満つるべき此の世界は苦みに満ちたる世界となつたのである。」

御慈悲一條にてあらせられる親神様には、此の悲

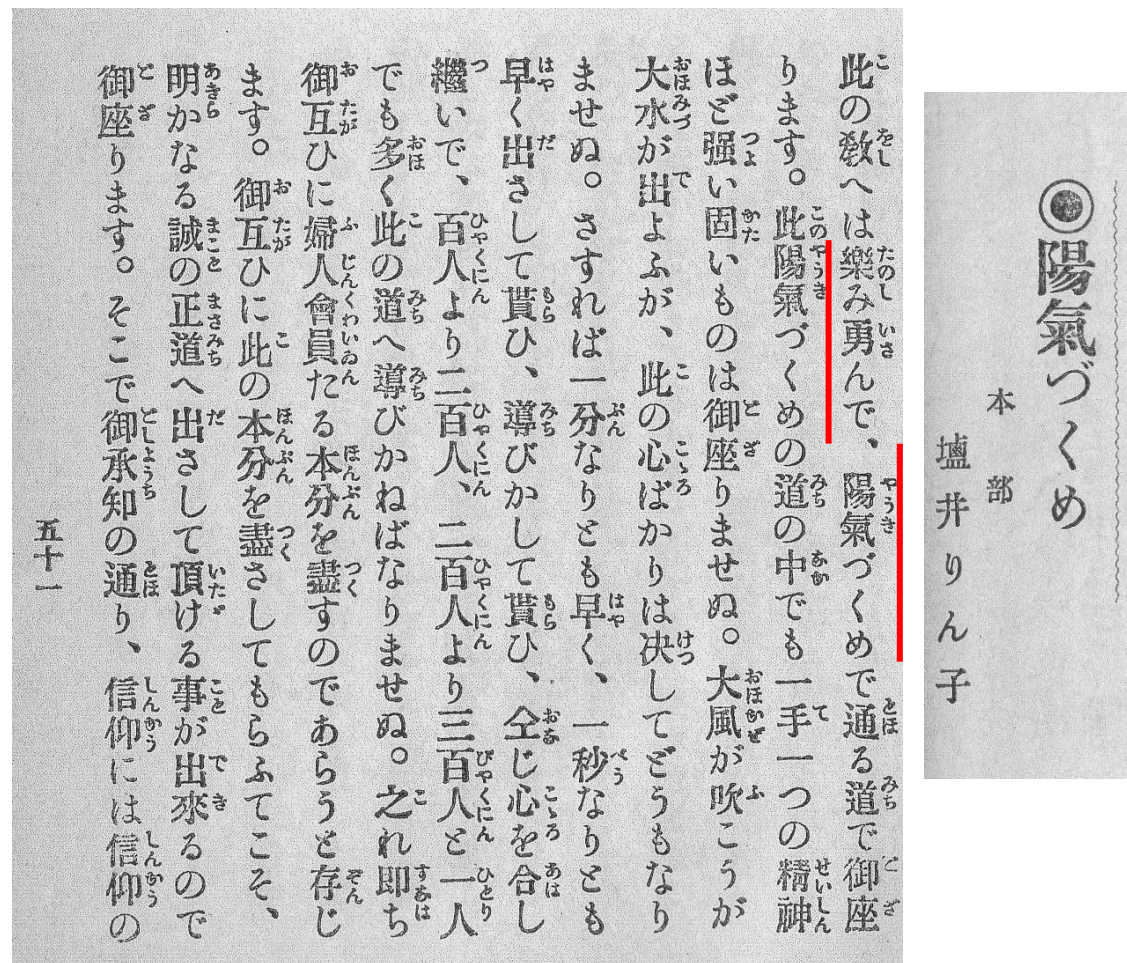
改元とようきづくめ

今上陛下御踐祚あらせられて、直ちに改元の事あり、『大正』と號せらる。『大正』は、易に『大亨以正、天之道也』とあるに典據せられたるものにして之れを大畜に見るに『剛健篤實輝光、日新其德、剛上而尚覽、能止健、大正也。』とあり。剛と云ひ、健と云ひ、新と云ひ、光と云ふ何れか皆な陽氣の意を示さざる。由来我が天理教は、陰氣を退けて陽氣を尚(※たつと)び、消極を去って積極に就き、汚穢を離れて清潔に向はん事を教ゆる『ようきづくめ』の宗教也。

本教は、明治二十一年教會設置の公認を受けてより、年々歳々、駸々乎として進歩發展し、今や居然たる一大宗教團體となれり。これ一に、其教徒等が能く教祖の衣鉢を襲ひで、陽氣の心を持し、陽氣の活動をなしたるが為めのみ。然れ共、人心は稍(※こずえ)ともすれば萎靡(※いび)し、萎靡して停滞し、停滞して腐敗し、腐敗してバチルス(※細菌)の生ずるなしとせず。されば陽氣の教を耳にし、陽氣の心を持せざるべからざる我が天理教徒も、同じく世間一般人の通有性を有する限り、人として免れ難き沈滞の氣の、時に又、個人の中に、教會の中に發生して、進歩を妨げ、發展を害し、延(※ひ)いて腐爛するなからんや。

バチルスは、天より降らず、地より湧かず、各人の心の中の埃より起る。埃は微細微小にして、常に人間意識の感覺に觸れずして生じ、積り積りては大山をなすに至る。茲に於てか、平素祓除の用意、寸毫も懈怠あるべからず。固より我等は、不燼(※じん)不滅、用ひて極りなき不思議の靈を神に享(※う)く。教祖の助を蒙(※こうむ)り、教理の道を辿り、常に健、常に剛、日其德を新にせば、庶幾くば大正の時代は、我等天理教徒の上に、更に赫々たる光輝を與へ、真に、『ようきづくめ』の人たるを得しめん。

左は前ページの文を読みやすいようにしたものです。下は同時期に書かれた「陽氣づくめ」のタイトルがあるものです。この時期までは天理教のキャッチフレーズは「陽氣づくめ」だったのです。



下の文章は『道乃友』大正6年4月号「陽氣ぐらし」の全文です。

『天理教教典』の教理の原型〈かしの・かりもの→ほこり(現世)→いんねん(前生)→たんのう→ひのきしん(因縁を切る)→陽氣ぐらし〉が出来たのは、明治45年2月に開催された「三教会同」(政府が主催して仏教・キリスト教・神道の各宗教家が集まって、宗教家が国家社会のために尽力することを話し合うことを目的とした会合)後に、その趣旨に沿って表明した文書『三教会同と天理教』(同年6月刊)です。現在の『天理教教典』後半の構成とほとんど同じといってもいいものです。この表明文書の線で、教内の用語等が整理されていきます。「陽氣・・・」の変化も、ちょうどその時期と重なり合います。

武谷氏の「陽氣ぐらし」では、「『たんのう』の理を修めて、どんな所も自分の過去に作つた因縁の現はれと悟って、おわび、ごんげ、たてかへにいそしみつゝ、日々に喜び勇んで」日常を通る精神的態度が「陽氣ぐらし」であると説かれています。

陽氣ぐらし

武谷兼信

一

御教祖の御遺訓に　／　『月日には人間はじめかけたのは、陽氣ゆさんが見たいゆゑなり』／　『世界にはこのしんじつを知らんから、みなどこまでもいづむばかりで』／　と仰せられたる所より察するに、最初神様が人間を御造り下されたる第一の目的は、人間に『陽氣ぐらし』をさせて、神人共に楽しみたいとの御思召であつたに相違ない。然るに人間は、神様の愛子たる多数人間のために造られたる此の世界を、吾れ一人のために造られたるものゝ如く誤解して、身引き身慾の心にて、吾さへよくば人はどうでもといふやうな自分本位の濁った心にて通り来たりがために、神様の御思召に背き、天理に背いたる結果、遂ひに病氣災難不自由といふやうな、いまはしき現象があらはるゝことゝなりて、病氣に苦しみ、災難に泣き、不自由をかこつ人多くなり行き、従つて自分の思ふやうにならず、好きなやうにならぬにつけては、自然／＼にいづむやうになり、陽氣であるべき此の世界は陰氣になり、楽しみに満つるべき此の世界は苦みに満ちたる世界となつたのである。

二

御慈悲一條にてあらせられる親神様には、此の悲惨なる人間世界の有様を御覧遊ばされ、如何にも残念に思召し給うて、一日も早く苦境より救ひ上げんと思召し給へども、一列の人間が是迄通りの心遣ひにては、天理として世界のたてかへは不可能なれば神の意思を説き、天理を論して、其の根柢たる心のたてかへをなさしめんと思し立ち給うて、本教を御開き下されたのである。さればこそ御遺訓の中には『今迄と心しいかり入れかへて、陽氣づくめの心なるよふ』と仰せられ、御神樂歌の中には、『いつも助けがせくからに、早く陽氣になりてこい』と仰せられたのであらうと思ふ。ゝ

「五」で「三」にあった「たんのう」をしてさんげして通るのが「陽氣ぐらし」という話が繰り返されます。その結果として、悪因縁が白因縁に切り替わり、真の「陽氣ぐらし」が出来るようになるだろうと結ばれます。

↪

三

思ふやうになったといつては喜び、好きなやうになったといつては勇むといふやうな喜び方や、勇み方は誰れにも出来ることであるが、それでは真の陽氣とは云はれない。又むやみに飛んだり、はねたり歌ったりするだけにても真の陽氣ではない。斯かる種類の陽氣では、思はしからぬことが出来たり、嫌いなことが出来たりした、場合に必ず陽氣は去りて陰氣になるに違ひない、神様が『陽氣づくめの心なるよふ』、『早く陽氣になりてこい』ど仰せられた陽氣は言ふ迄もなく、真の陽氣であつて、如何なる場合にも神様の御恩を感じ、借物貸物の理を忘れず、自分の因縁を自覚して、どんなことがあつても、どんな目に出会つても、これは自分が過去に作った因縁の現はれである、過去に蒔いた種子の生えたるものであると悟りて、**自分の因縁のさんげをしつ**、所謂『たんのう』の理を修めて、これで結構、これでこそ過去に作つ悪因縁を切つ頂くことが出来るのである、と難儀、苦勞、不自由の中から、真実喜こんで、**勇んで通ること**であつて、これが**真の陽氣**である。

四

元来案じや心配のために陽氣になられぬのも、嫌いなことや思はしくないことの出来た場合に心のいづむのも、心の底に見引き身欲の勝手心があるからである。此の勝手心を去り、心澄み切り、天理教教典に示されたるが如く、『人間の本分を尽くし、天神の命を待つ』、的の美しい、浄らかな誠の心にて通れば日々は必ず陽氣に勇んで暮らされる筈である。御教祖の御遺訓に、『心さいすきやかすんだことならば、どんなことでも楽しみばかり』と仰せられたのは、此の辺の理を御さとし下されたものであらうと思ふ。

五

斯く心をすませ、『たんのう』の理を修めて、どんな所も自分の過去に作った因縁の現はれと悟つて、おわび、さんげ、たてかへにいそしみつゝ、日々に喜び勇んで、精神的に『陽氣ぐらし』を続けて行くことが出来れば、其の理に依りて、悪因縁は次第／＼に切つて頂くことが出来るに相違なく、悪因縁が切れるに従つて、嫌いなことや、思はしからぬことは次第／＼に減少して、好きなことや、望ましきことが次第に出来てくるやうに成るべく、其の中を更に『陽氣ぐらし』を続けて行けば、遂には悪因縁は切れて白因縁の人となり、病氣、災難、不自由等のいまはしきことは求めても来らず、健康、幸福、自由等の望ましきことは求めずとも来るやうになり、精神的には勿論、物資的にも真の『陽氣ぐらし』をさせて頂くことが出来るやうになるに相違ない。神様(おやさま)の愛子たる人間をして此の境涯に入らしめんことこそ、実に大神様(おおかみさま)の望み給ひ、せき込み給う所にして御教祖五十ヶ年の御苦勞の真意も、要するに茲にありしことゝ思ふ。(完)

「陽気ぐらし」(武谷兼信)は『三教会同と天理教』の教理を前提にしている

大正6年4月号の「陽気ぐらし」の記事は、現在の自分の境遇は過去に作った因縁の現れであるという教理を前提にしています。この教理は明治45年に書かれた『三教会同と天理教』に出ているものです。

『道乃友』大正6年4月号「陽気ぐらし」のポイント

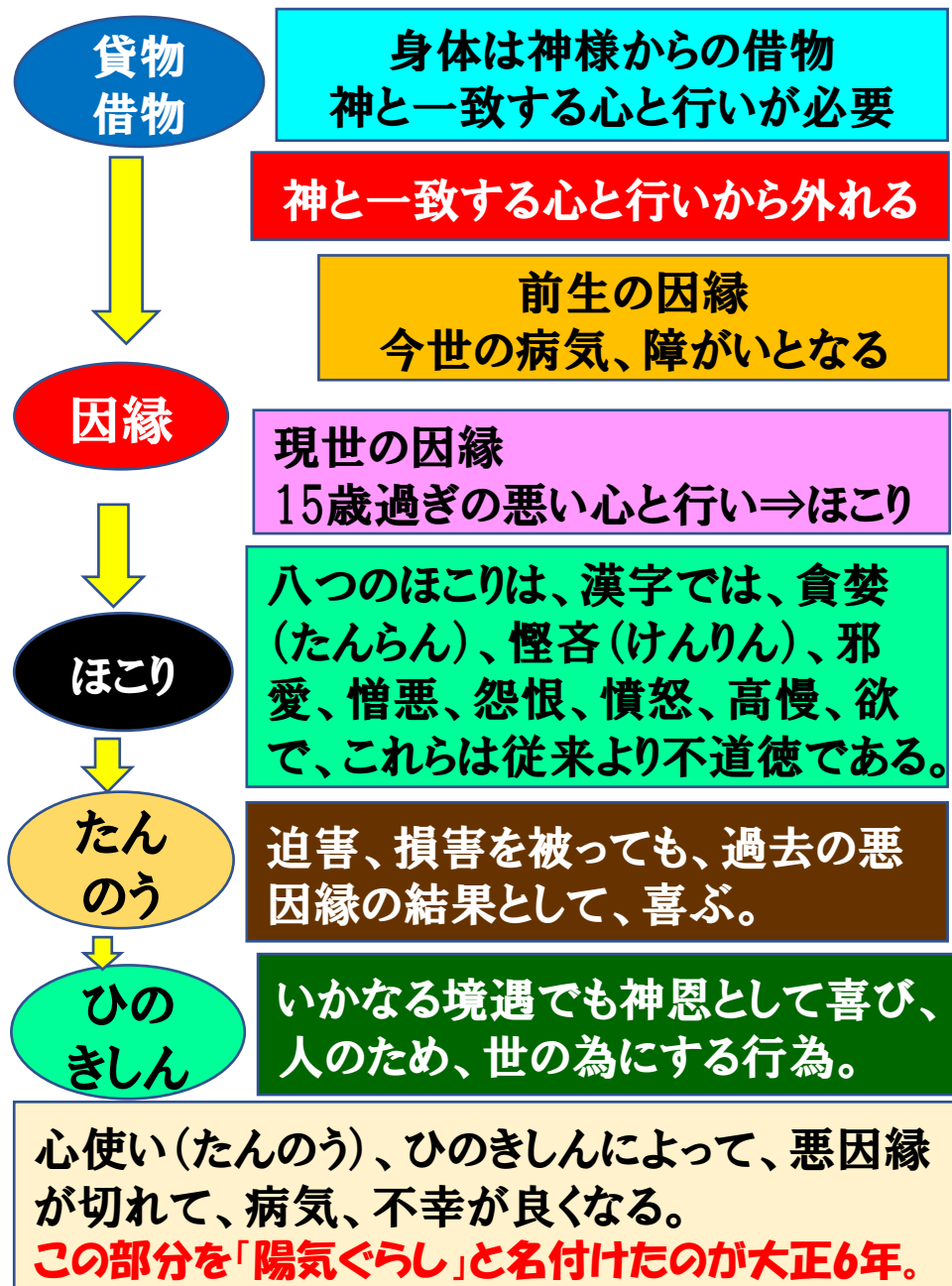
神様の御恩を感じ、借物貸物の理を忘れず、自分の因縁を自覚して、どんなことがあっても、どんな目に出会っても、これは自分が過去に作った因縁の現れである、退去に蒔いた種子の生えたるものであると悟りて、自分の因縁のざんげをしつゝ、所謂『たんのう』の理を修めて、これで結構、これでこそ過去に作つ悪因縁を切っ頂くことが出来るのである、と難儀、苦勞、不自由の中から、真実喜こんで、勇んで通ることであって、これが眞の陽気である。

我々人間の靈魂と云ふものは神様の分霊を与へられたのであって我が物であり、又我が身体は神様から借り受けて居るものであるのです。従来我々はこの身体を我が物と思うて居ったのであります。然るに教祖は此の身体を我が物でもなく、父母の物でもなく、実に神様のものであって我々人間は神様からこれを拝借して居るのであると説かれたので、これを本教にては「貸物借物の理」と申して居ります。即ち神様から云ふ時は貸物、人間から云ふ時は借物であります。……然るに人間は神より与へられたる心の自由によって悪しき方に心をつかふが故に、多くの人間は何等かの疾病に罹り、禍害（わざわい）を受け、短命に終るのであります。而して其の悪しき心づかひと云ふことは、教祖は之を一つには前生の因縁二つには現世の因縁と説かれたので、其の第一の前生の因縁と云ふのは前生に於いて心に埃を積んで置いたのが原因となつて、之を現世へ持ち越して来たので、去年手入れの悪しかった種子は、今年の發育が好くなくと同じ道理で生れながらにして盲目であつたり、跛であつたり、愚鈍であつたりなどの遺伝よりするものは、皆此の理に由るものであると教へられて居ります。又緑児にして、道路に捨てられ、又貧賤の家に生るゝ如きも、此の前生の因縁です。而して第二の現世の因縁と云ふのは、十五才以来物心を知ってから我が心づかひと行ひとより生ずる罪科であります。而して此等の罪科を教祖は埃と云ひ、之を八ツに分けて説かれました。其の八ツの埃とは（一）ほしい（二）をしい（三）かはゆい（四）にくい（五）うらみ（六）はらだち（七）かうまん（八）よくであります。（『三教会同と天理教』P34. 明治45(1912)年6月. 道友社編集部）

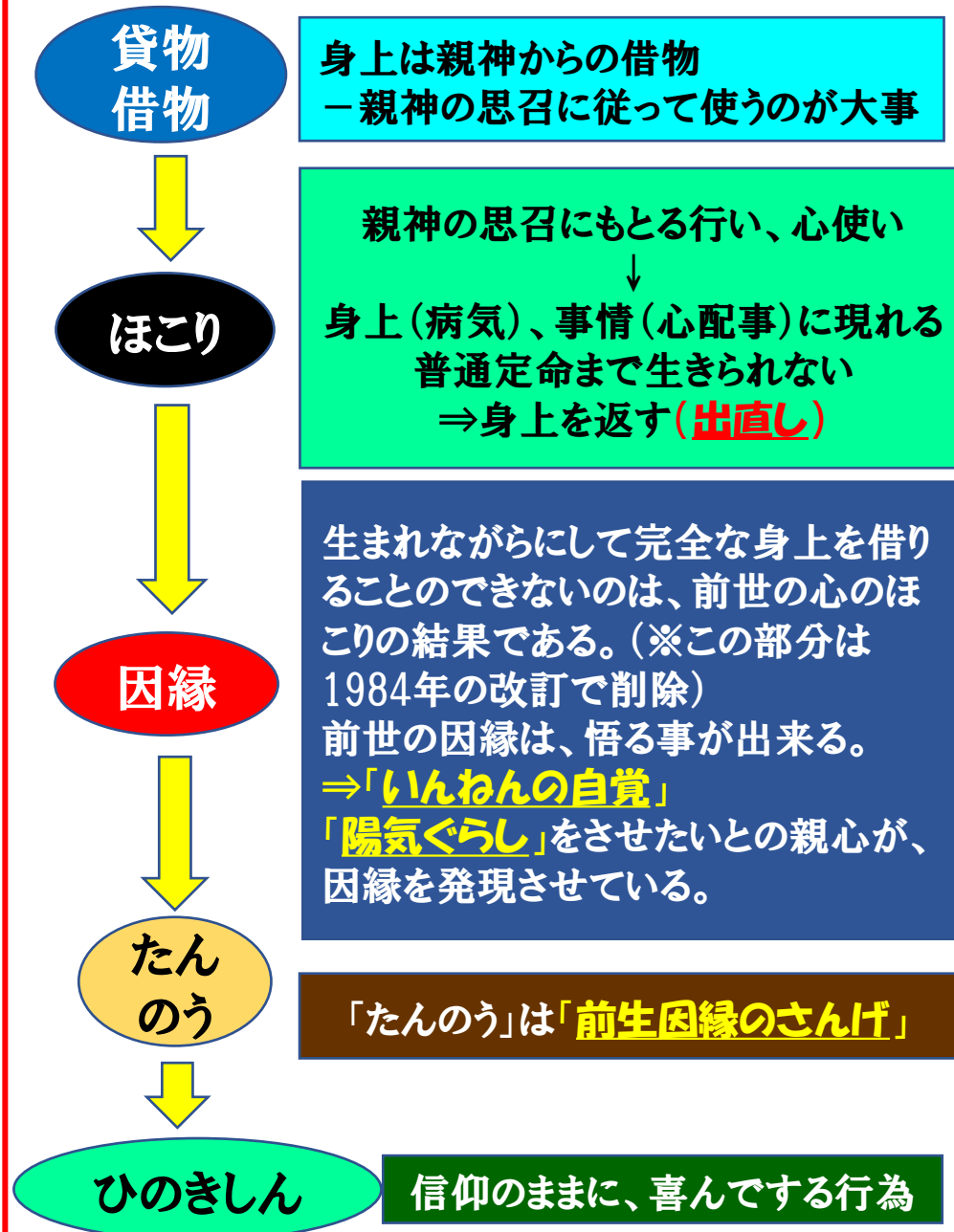
『三教会同と天理教』と『天理教教典』の教理の構成はほぼ同じ

現在の『天理教教典』「後編」の構成は『三教会同と天理教』の教理構成とほぼ同じです。「陽気ぐらし」についていえば、『三教会同…』ではまだその用語はなく、大正6年にそれが作られて、現『教典』に用いられたということになります。

『三教会同と天理教』教理の構成



現行『天理教教典』第7章、第8章の構成



現在の「天理教教理」は明治45年以降に作られた

◎『三教会同と天理教』と『天理教教典』後編は、構成、内容が非常によく似ていて、「因縁」と「ほこり」の位置が逆になっています。
◎『天理教教典』にある「出直し」「いんねんの自覚」「前生因縁のさんげ」「陽気ぐらし」は『三教会同と天理教』では使われていません。
◎「陽気ぐらし」は大正6年、「出直し」は大正3年に『道之友』に出てきます。
◎初代管長中山新治郎は大正3年12月に49歳で亡くなっています。大正元年以降の教理の変質と関連があるかもしれません。

『三教会同と天理教』は2万部も作られ、講演会は全国で約一年の間に2千回以上開かれ、そこには内務省の後押しということで、地方の有力者が参加し、講師を駅で見送ったといえます。それは淫祠邪教としてさげすまされていたそれまでの天理教から見れば、社会的認知を得たと感じられるもので、また、これ以降教勢も拡大していきました。

それは、「『国民教化運動』への積極的な参加を通しての教団活性化の試みが、**天理教信者たちの宗教的实践を教祖の思想から如何に逸脱させてしまったのかは改めていうまでもない**」（「日本の近代化と民衆宗教」李元範.1995.博士論文.P80）ものでもありました。

教内文献で「三教会同」に触れているものとして『天理教青年会史』（第1巻P42）があり、宣教員講習会の内容15項目が出ています。

『三教会同と天理教』が2万部も作られ、自らの教会組織はもちろん、日本全国の各県庁、郡役所、警察署、新聞社、図書館など約3,500ヵ所に寄贈するという大々的な宣伝活動が行われた。また、明治45年（1912）3月の機関紙「道乃友」には「宗教と政治と人格」という標題が掲げられ、教祖みきの教えの本質が政治的な参加や人格の向上にあるという主張がなされるのであった。そして、このような教義解釈とともに展開される講演会活動は、同年9月から翌年8月までの一年間の地方における講演会数だけでも2,074回にのぼり、講師として動員された人数が12,400人余りにもなる全教団あげての大々的なものであった。

この講演会は「国民教化」運動として位置づけた内務省の後押しがあったので、地方の官吏や有志たちの積極的な応援のもとに行われた。機関紙「道乃友」はその様子を「・・・駅出発の際は署長、小学校長、中学舎監の諸氏が特に見送られ、号砲を打揚げ、我が一行を盛んにして下さったのは誠に有難かった」と伝えているが、地方の信者たちはこのような「お偉いさん」の天理教講演会の歓待を、地域社会における自分たちの權威の向上として感じていた。そのため、各地方の信者たちからは教団本部に講演会への要請が殺到し、全教団あげての講演会ラッシュが始まった。

以上の講演会が信者たちの支持を得た理由のもう一つは、講演会が教勢拡張という現実的な利益に結びついたことであった。事実、天理教はこの時期から教勢の伸びをみせ始め、明治30年頃から始まった天理教の低迷期に終止符が打たれた。そして、このような天理教の新しい教勢拡張の手段となったのが、通俗的な倫理の実践を説いた「集団布教方式」だった。（『何のための〈宗教〉か？』 P44. 李元範. 青弓社. 1994）

『三教会同と天理教』は、天理教の「教え」が勤儉・儉約・正直・従順といった世俗倫理を実行するものであるとして「是を以て何れの地方でも天理教の信徒と云えば官吏町村吏員を敬ひ長者を尊びまして納税の義務などを怠るやうなものではなく、実にすなほなものであります。」といて「国民教化」運動において天理教の「教え」が有効であることを主張している。（「日露戦後の宗教政策と天理教」李元範P133.『宗教研究』294号.1992）

『天理教青年会史』が記す「三教会同」の趣旨に基づく天理教教師講演会

「三教会同と天理教」の発行後に行われた天理教教師講演会は、「対政府的姿勢への顧慮の多いもの」であり、「講師も、主として教外から天理教校の講師として招へいされていた人々が当たった」と書かれています。教祖の教えに基づく講習会ではなく、政府の「三教会同」実施の主旨に合ったもので、教外者が講師を務めたのです。その様な講演会を機に産声をあげたのが青年会でありました。

明治45年2月、時の原内務大臣から、神道、仏教、キリスト教の各宗教に対し「三教会同」という運動が提唱された。「三教会同」とは、一種の官制の宗教運動で、床次内務次官が欧米視察の結果、「文明の根底は宗教的信仰なり」との考えに基づき、神道、仏教、キリスト教の三教の代表者の協議会を設け、日露戦争後の国民の思想を統一しようとしたものである。／ 各宗教は、この政府の意向に対してなんらかの具体策を立てて答申し、その了解を得て、それぞれ実施に移すことになった。／ 本教でも、まず「三教会同と天理教」という小冊子を二万部印刷して、本教の態度を教内外に示すとともに、同年8月、教会本部ならびに各教務支庁から百八十余名の宣教員を選抜、おやさとにおいて、二週間にわたる第一回宣教員講習会を開き、終了後直ちに宣教員を講師として全国に派遣、「三教会同」の趣旨に基づく天理教教師講演会を開催した。翌大正2年8月には、第二回宣教員講習会を開き、講師の陣容強化をはかり、その徹底を期した。／ 天理教教師講演会は、政府の提唱する「三教会同」の趣旨にそったものであるが、本教としてはこの機会に、積極的に本教の教義を一般社会に紹介し、“七十五年の句”にふさわしいにをいがけの実をあげようとしたのである。／ そこで、宣教員講習会がその趣旨にそって行なわれたのであるが、複雑な社会情勢下の実施ということもあって、本教と社会の関連を明らかにすることに重点をおいてなされ、対政府的姿勢への顧慮の多いものとなった。

講習会の学科の内容は、

一 明治維新後我が国運発展の大勢 ／二 天理教の沿革 ／三 御かぐら歌 ／四 ひのきしん ／五 明治天皇の御製
六 我が国に於ける政治と宗教との関係 ／七 建国の由来 ／八 天理教と神宮及び神社との関係 ／九 天理教と皇室との関係
／十 天理教と国体との関係 ／十一 天理教と社会問題との関係 ／十二 天理教と生産事業との関係 ／十三 天理教と一般国民との関係
／十四 天理教と国民教育との関係 ／十五 天理教と一般道徳との関係

以上の十五項目で行なわれ、講師も、主として教外から天理教校の講師として招へいされていた人々が当たった。

このような題材は、時代感覚の鋭敏な青年たちにとって、待望久しかったものであり、喜びと勇みのうちに吸収された。特に、信仰の体感的把握への実践を決断させる“何物”かを求めて模索し、同志的結果を固めつつある二代目の青年たちの多くは、青年の合理性を一応納得させてくれる内容と青年の行動性を満足させる全教あげての活動に、燃えるような生きがいを感じた。各教会の青年は、堂々たる発会宣言を発表し、続々と青年会を結成、救世済国の熱願をひれきする講演会など、活発な活動を展開した。
(『天理教青年会史第一巻』P43. 1970. 天理教青年会本部)

『世界たすけへ更なる歩みをー「復元」五十年にあたって』は「三教会同」以降の動きを肯定する

三代真柱が心臓手術を受けた年の10月に発行された本に『世界たすけへ更なる歩みを』(天理教表統領室特別委員会編.1995)があります。副題に「『復元』五十年にあたって」とあるように、1946(昭和21)年に『復元』という雑誌が創刊され、それから50年が経ったので、戦前の苦難の歴史を振り返り、戦後の復元の実績を示し、更なる歩みを進めようという趣旨のものです。

この本は、『青年会史』が綴る「三教会同」後の天理教の動きを教祖の言葉とされる一節を引用しつつ、当時の教団の姿勢そのままをプラスに評価しています。しかし、政府の方針に合わせ、主に教外の講師によって行われた講演会の内容は、李元範氏が述べるように「天理教信者たちの宗教的实践を教祖の思想から如何に逸脱させてしまった」のではないかという問いはそこには存在しません。戦前の天理教の動きは、「教えと国家体制、世間の誤解、偏見との狭間」で悩んだばかりではなく、積極的に国家体制に迎合していった時代もあったのです。その視点がこの本では欠落しています。その象徴的な用語の一つが「陽気ぐらし」であったのではないのでしょうか。

大正時代は民間各方面からの相変わらずの非難、中傷はあったものの、一派独立を果たし晴れて国家公認の一宗教として認められたこともあって、政府からの正面切った攻撃は影をひそめ、比較的穏やかな時代であったといえることができる。／ それに加えて、政府が国民教化運動を推進するために、神道13派、仏教53派、キリスト教7派の三教の宗教家を動員しようと、明治45年に「三教会同」政策を構想したことが大きな影響を与えた。「三教会同」政策による政府の意図は、日露戦争後の国内社会体制の再編成にあったのであるが、それに対する国民の精神的同意と、全面的参加の実現をもくろんだものであった。／ これまで絶えず官憲の監視下に置かれ、淫祠邪教視されていた状況から、一転して国家の公的な支援を得て、公然と布教活動をする場が与えられたことに、教内が大きな期待を持ったのは、ある意味では当然であった。明治45年は立教から数えて75年目にあたり、教祖の「神がこの屋敷へ天下つて75年たてば、日本あら／＼すます。それから先は、世界隅から隅まで天理王命の名を流す」というお言葉どおり、いままさにその句が到来したというように受けとめられたからである。それは**国家的要請という事態を超えて、天理教独自の「句」を捉えた活動として、積極的な布教活動を展開すべき時として位置づけられた**のである。(『世界たすけへ更なる歩みを』P32)

序　／　1945年8月、日本の敗戦を迎えた戦争終結のその日、二代真柱はただちに「復元」を提唱した。「復元」とは、その字が示すとおり、教えを教祖の教えどおりに「元に復す」ことである。天理教は戦時期、思想統制を目指した国家権力によって厳しい弾圧を受け、教義の一部削除、祭儀の一部変更を強制された。いわゆる「革新の時代」である。「復元」の提唱は、この限定された一定の期間のみに対応することを意味するものではない。　－中略－　教祖から教えられた教えをいかに守り、そして実現していくかという先人の苦心と苦労は、**教えと国家体制、世間の誤解、偏見との狭間**にあって絶えることなく続いた。いいかえれば、少なくとも**真っ向から教えを説き得なかった時代が、「復元」に至るまでずっと続いていた、という方がより正確であろう**。それだけに、日本の敗戦の当日、すぐさま二代真柱が「復元」を提唱したことは、極めて大きな意味を持っている。(『世界たすけへ更なる歩みを』P13) 21

「陽氣ぐらし」をやめ、「陽氣づくめ」にすることが復元の第一歩

「陽氣ぐらし」という言葉は、ここまでみてきたように、明治45年の「三教会同」の主旨に沿って作られた教理とその実践を示す心の姿勢を表現するものです。つまり「陽氣ぐらし」という言葉のなかには改められなければならない大正期の教理が内包されているのです。

ですから、『世界たすけへ更なる歩みを』が復元の実績を示そうとした本であっても、大正期の天理教の活動を肯定的に捉え、「陽氣ぐらし」を信仰の目的とする限り、本当の復元には迫りえないのです。

「元を極め、根源をたづねる所に復元の意義があり復元の活力がある」のであり、大正期にできた「陽氣ぐらし」をやめ、「おふでさき」の「陽氣づくめ」に戻ることが、本当の復元の第一歩です。

(※昭和)31年、教祖七十年祭には全教会に『おふでさき』が下付され、『稿本天理教教祖伝』が編纂されて出版された。教祖伝は単なる伝記としてではなく、教典によって信仰的に物事を判断するとともに、教祖伝によって「ひながた」を求め、陽氣ぐらしの足取りを進めるための実践教義書としての位置づけがなされている。／ そうした点から、教祖七十年祭は「陽氣ぐらし」への門出としての意義を世界に向けて表明したものであったということができよう。「陽氣ぐらし」に向けての日々の信仰生活のあり方は、具体的に「神一条の精神」「ひのきしんの態度」「一手一つの和」という三信条に示された。さらには朝起き、正直、働き、という教えの実践、内に「たんのう」、外に向かつては「親切」、というように、次々と陽氣ぐらしを味わう道を教示されたのである。(『世界たすけへ更なる歩みを』P62)

『復元創刊号』序 1946年4月

すべてが元に復る旬が来ました。／ 新日本、新発足、新建設、新時代、新人等と、あらゆる面に新の字が時代の寵児然と巾を利かす様になりましたが、その新は必ずしも木に竹を継いだ様に現れ来るものとは思はれません。必ず生れ出る旬があり、生れるに至る努力があって殆めて現れるものであります。根のない新生命は決して出現せないものであります。／ 革新の数年を経て、戦争の終結と共に復元の時代となりました。すべては一新されて、革新以前の事々を思ひ返す様になりました。一見恰も夏来ると共に不必要となった冬仕度を、冬と共に再び恋ひしたふて、探し求める様に、革新以前をあこがれる様にも見えますが、去年の春は決して今年の春ではない如く、復元は決して革新以前に復する事を意味するものではありません。／ 蓋し復元と復旧とは決して同じ事を意味せないものであります。以前の姿に復し、又懐旧の情に遊ぶのは決して復元ではありません。あくまでも、元を極め、根源をたづねる所に復元の意義があり復元の活力があると信するのであります。／ いかほどにみえたる事をゆうたとて もとをしらねばはかるめはなし IV 81 ／ と教祖様もお教下されていますが、元は尋ねてもたづねて、も尋ね尽きないものであり、又探ぬれば探ねる程、新しい活力のわくものと信ずるのであります。復元こそ新天地、新文化の母であるとさへ云ひたいのであります。